

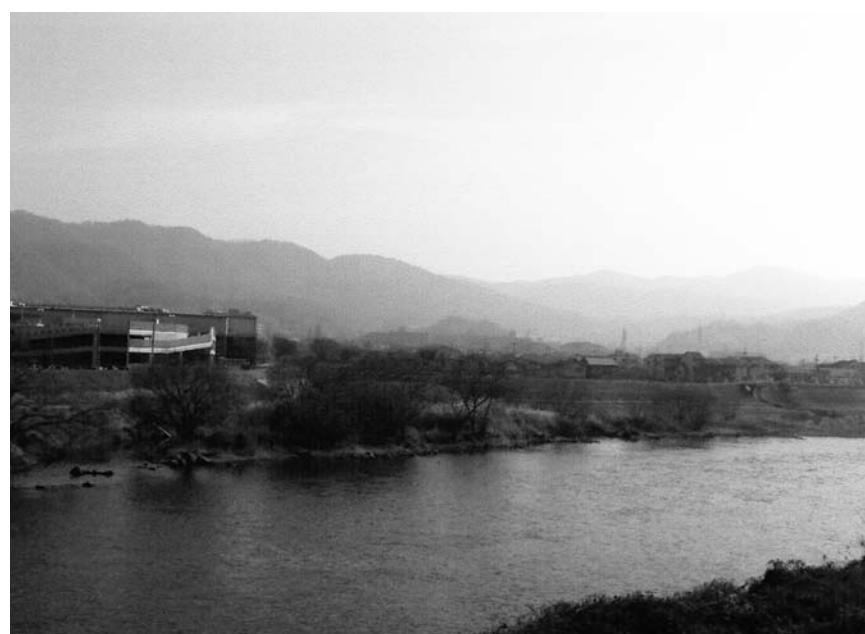


答 堤防の現状は「土まんじゅう」という表現どおりで、工業的見地に基づく建設とは思えない。右岸には戦川等多くの河川が宇治川に流入している。戦川河口の荒廃した様子に不安は増幅する。内水被害、右岸対策は。

答 宇治川の堤防の安全性は、基礎の地盤や堤防の状態をボーリング調査により把握しており、降雨、洪水時及び後期放流による長時間続く水位を条件として詳細な検討をした結果、宇治市域の宇治川右岸堤防での浸透・

宇治川治水

本市の見解を問う
— 答弁 — 堤防の安全確保を、
河川管理者に強く求める



▶宇治川右岸堤防、戦川付近

人権 いかがか

同和行政の終結を求めるが
— 答弁 — 新組織へは加入していく
方向で取り組む

問 同和行政の継続を示す山城地区市町村連絡協議会等の再編について、新組織をつくる、加入しないことを求めるが、いかがか。

答 組織再編については、山城地区における人権尊重理念の普及等に向け広域連携、市民連携の仕組みを構築しようとある。本市と

宇治川護岸遺跡(太閤堤) の保存の方策は

— 答弁 — 遺構の全体把握を進めた上で、
協議を進めたい

問 遺跡は、非常に貴重なものであるとして住民の保存運動が起り、約5000名の署名が集められた。市は、この価値をどのように認め、どのような方策を考えているのか。

答 この護岸には、石出も1カ所見つかった。石出は、水流から護岸を守る施設で、下流側は当初の姿がよく保存されている。この護岸施設の築造年代は、出土遺物が少なく、正確には判断出来ないが、豊臣秀吉が築堤を命じた太閤堤に関係する治水施設ではないかと考えられる。また、石出の石の積み方は、布積み崩しという安土桃山時代に使われた技法のことである。今回出土した遺構は、見学された専門家によると、当時の治水の実像を具体的に知ることが出来る全国的にも数少ない発見と評価されている。現在、先に検出した遺構の南側を発掘調査中である。遺構の全体把握を進めた上で、

生活、経済活動との調和により形成されるものであり、地域の固有の特性と密接に関連するものであると定義されて

いる。京都市と本市では、歴史、文化や自然など地域の特

性が違う。本市は本市として独自のカラーを持つべきと考える。市民の皆様の理解と協

力を得ることが大変重要であると考えて、景観行政を

推し進めたい。これまで市

は景観行政に積極的に取り組んでおり、まちづくり条例の

制定により、さらに具体的に市民と協働して取り組みたい。

とが必要であると考えている。

とがあると認識をしており、引き

続課題解決に努めていくこ

とが必要であると考えている。

とがあると認識をしており、引き